

## 第 10 回 (2014 年) 日本藻類学会 研究奨励賞

### [ 日本藻類学会 研究奨励賞 受賞記念特集 ]

2014 年 3 月 15 日におこなわれた日本藻類学会総会にて、第 10 回 (2014 年) 日本藻類学会研究奨励賞の発表と授与が行われた。同賞は藻類学及びその関連分野において優れた研究成果をあげた若手研究者を表彰するものであり、推薦委員会からの報告 (推薦者と推薦理由) に基づいて、評議員会にて同賞の選考・決定が行われ、今回、大田修平 (東京大学大学院新領域創成科学研究科、微細藻類を用いたバイオ燃料増産株作出に関する基礎研究と新技術開発) と市原健介氏 (日本女子大学理学部 (現: 東京大学大学院新領域創成科学研究科)、緑藻アオサ属藻類の低塩濃度適応に関する分子進化的研究) が受賞された。

### ～講評～

大田修平氏の主要な研究成果は、まず、クロララクニオン藻の分類学的研究において、多くの新たな分類群の記載と属レベルの分類基準の再検討を通じて、この植物の多様性の理解と分類体系の構築に多大な貢献を果たしたことだが、その主たる成果は本学会英文誌 *Phycological Research* (3 報) をはじめ、多くの原著論文として国際誌にて発表され高い評価を得ている。学位取得後も分類学の研究を続ける傍ら、博士研究員として内外の研究室に所属し、細胞分裂や細胞骨格に関する細胞生物的分野、さらに、分子生態学的手法を用いた植物地理学的分野まで研究活動の対象を広げてきた。また、現在は、応用分野である藻類バイオ燃料研究において、細胞微細構造観察、変異株の育種、物質生産の定量など基盤技術の開発にも多くの業績を挙げている。

市原健介氏の主要な研究成果は、本来は海産である *Ulva* 属の淡水産種を用いた様々な研究を通じて、海産植物の低塩濃度適応機構に関する多くの新知見を得たことである。氏の研究は当該種の記載と系統解析にはじまり、低塩濃度耐性と生育地との関係やその耐性機構に関与する遺伝子群を明らかにする生理学的な研究にまで発展しているが、その主たる成果は本学会英文誌 *Phycological Research* (3 報) をはじめ、多くの原著論文として国際誌にて発表されて高い評価を得ている。さらに学位取得後は、低塩濃度耐性獲得の分子進化に関する海産/汽水産種と比較研究をはじめ、シオグサ科緑藻や淡水紅藻における多様性研究などに対象を広げて研究活動を発展させている。

以上のことから、両氏の高い研究能力と活発な研究活動を評価するとともに、今後も藻類学の発展のために大きな貢献をされることを期待し、同賞の授与を決定した。

### 第 10 回日本藻類学会研究奨励賞を受賞して

大田修平

この度は第 10 回日本藻類学会研究奨励賞を受賞させて頂きました。推薦していただいた河野重行先生ならびに、指導教官である石田健一郎先生、ご講評頂いた先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。日本藻類学会は 2003 年の三重大会からほぼすべての大会に参加しておりますので、学生の頃から馴染み深い学会のひとつです。このような学会で奨励賞を頂き大変光栄に存じます。私は現在、大学院からポスドク時代に行っていた微細藻分類学から少し研究の方向性を変えて、藻類のバイオマスや育種研究を行っております。今回の受賞は 2011 年 7 月から東京大学大学院新領域創成科学研究科で行っている微細藻類を用いた藻類バイオマス研究および重イオンビーム照射による微細藻類の育種研究を評価して頂いたものですが、私が大学院時代から行っている微細藻類の分類学的研究の成果も含



授賞式を終えて：市原健介氏 (左)、大田修平氏 (右)

めてご講評を頂きました。これまで、クロララクニオン藻をはじめ、クロレラやヘマトコッカスなど様々な微細藻類を扱ってきたことと、研究のフィールドを変えたことで、多角的に藻類学を見つめなおすきっかけになりました。たとえば、これまで身につけた藻類の形態学的な知識や顕微鏡技術を現在の研究に活かし、逆に、現在行っている研究の中で身につけたゲノム関連の知識や細胞生物学的視点を藻類の系統進化学に応用できないかと日頃考えながら研究しております。最後になりましたが、これからも日々研鑽に励み、藻類学の発展に貢献したいと思っております。

(東京大学)

## 第10回日本藻類学会研究奨励賞を受賞して

市原健介

このたびは第10回日本藻類学会研究奨励賞を頂き、誠にありがとうございます。今回の受賞は学部から博士過程にかけておこなった緑藻アオサ属藻類の低塩濃度適応に関する研究を評価して頂いたもので、大変光栄に存じます。本賞を受賞できたのは、これまでの研究生活を通して、多くの方からの助言や協力があってこそ、特に学部時代の指導教官である北海道大学・増田道夫名誉教授、大学院時代の指導教官であった北海道大学・堀口健雄教授、また研究の方向性、実験など実際的に多く

の部分で指導をして頂いたお茶の水女子大学・畠田智准教授には心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げたいと思います。

初めて学会に参加したのは学部4年生の時に、鹿児島大学でのものでした。初めての口頭発表で緊張していた私の拙い発表に対して、温かい質問やコメント等を頂き、大変勉強になったことをよく覚えています。最初の学会参加から10年近い年月が過ぎ、私にとって藻類学会は様々な藻類を用いた最新の研究を見聞できる場として、またお世話になった先生方や諸先輩方、後輩にあたる学生たちと親交を温める場として、なくてはならないものになっている気がします。

学位取得後は学会を含めた藻類コミュニティの繋がりの中から、東邦大学の宮地教授の研究室で緑藻シオグサ科植物の系統分類学研究や日本女子大学の関本教授の研究室でミカヅキモの有性生殖に関する研究に携わらせて頂き、新しいテーマや手法に触れることで、自分の中に新しい引き出しを持つことができたと思います。今年度からは東京大学の河野重行先生の研究室に所属し、学振特別研究員として研究をおこなう機会を得ることが出来ました。テーマは大学院時代のものを発展させ、主に汽水に生育しているスジアオノリに着目し、海藻における環境適応や多様な生殖様式の進化について研究を進めて行く予定です。頂いた賞に恥じることはないよう、精進していき、これまでお世話になった方々、日本藻類学会に恩返しができればと思います。

(東京大学)

### 日本藻類学会 研究奨励賞 歴代受賞者

第1回 (2005年度)

**吉井 幸恵氏**：緑色植物の光合成アンテナ系の多様性と進化

第2回 (2006年度)

**坂山 英俊氏**：培養株と卵胞子壁表面・断面構造／分子系統に基づくフラスコモ属（シャジクモ藻類）の分類学的研究

第3回 (2007年度)

**加藤 亜記氏**：日本産殻状紅藻イワノカワ科の系統分類学的研究

第4回 (2008年度)

**内藤佳奈子氏**：微細藻による鉄取込み機構と赤潮発生メカニズムの解明

第5回 (2009年度)

**佐藤 晋也氏**：無縦溝珪藻類の形態学および分子系統学的研究

第6回 (2010年度)

**神川 龍馬氏**：微細藻類における遺伝的多様性の検出とその応用に関する研究

第7回 (2011年度)

**平川 泰久氏**：クロララクニオン藻の葉緑体へのタンパク質輸送機構

第8回 (2012年度)

**Ni-Ni-Win 氏**：形態学と分子系統学的解析によるウミウチワ属（褐藻アミジグサ目）の系統分類の再検討

第9回 (2013年度)

**山口 愛果氏**：従属栄養性渦鞭毛藻類の系統分類学的研究

第10回 (2014年度)

**大田 修平氏**：微細藻類を用いたバイオ燃料増産株作出に関する基礎研究と新技術開発研究

**市原 健介氏**：緑藻アオサ属藻類の低塩濃度適応に関する分子進化学的研究